

交響乐的回想 ～武蔵とわたし～

光 野 正 幸

第一章：アレグロ・ヴィヴァーチェ

1982年4月、わたしは人文学部欧米文化学科（ドイツ文化専攻）に専任講師として着任しました。ニーチェ研究の大家・氷上英廣先生（1911-86）の退職に伴い、その後任採用のために発議された人事により、本郷の東大文学部で助手を務めていたわたしが若輩ながらご推挙いただいた次第でした。当時ドイツ文化専攻に所属していたのは富岡近雄、酒井滋、杉田弘子、鈴木満、兵頭高夫の諸先生がたで、大学図書館棟と同じく半年まえに竣工したばかりの教授研究棟の最上階に氷上先生を含む4人が個人研究室をかまえていらっしゃいました。わたしは氷上先生が半年だけお使いになった10階いちばん奥、南向きの部屋を受け継ぐことになり、個室の研究室が用意されている大学がまだめずらしい時代だったこともあって、有頂天になったものでした。

大学教員人事が「公募」によって進められることも、現在でこそあたりまえになっていますが、当時は稀でした。むしろ、「学会や出身校の人脈を活用して優秀な人材を推薦してもらおう」ほうが、間違いが少ない、というのが「業界」の一般的な考えかただった、と言ってよいと思います。もちろん、わたし自身がその「優秀な人材」だったと言うつもりは毛頭ないのですが、氷上先生の「口利き」によって駒場から若手教員を確保する人事がつづいたので、次の人事は本郷から、という主旨で話を進めた、と後に富岡先生から伺った記憶があります。

実はわたしは着任早々から、「問題児」でした。前年の秋にDAAD（ドイツ学術交流会）の給費留学生に応募して首尾よく合格し、1982年の秋からMünchenに留学することが内定していたのです。いまからふりかえると自分でも「若気の

至り」としか言えませんが、武蔵の人事のお話をいただいたとき、叶うことならどちらも諦めたくないと考え、面接してくださった先生がたに率直に「着任して半年後に予定どおり留学することを認めていただけるなら、よろこんでお受けいたします」と申しあげたのでした。あつかましい「条件つき受諾」の申し出が容認していただけたので、わたしは意気揚々と着任し、意気揚々と予定どおり留学にも出かけることができましたが、後から考えると、学部内、また全学レベルで新任者の「わがまま」について了承をとりつけなければならなかった富岡先生をはじめとする諸先生に対しては、あらためて身が縮む思いで一杯になります。

一年半の留学を終えて帰国した1984年4月、学長室に呼ばれ、浅羽二郎学長から「着任早々の留学を、しかも一年以上にわたって特別に認めたのだから、最低むこう5年間は本学に勤務してもらわなければならない」と言い渡されましたが、結局その後40年にわたって江古田に通いつづけることになったわけで、多少の「恩返し」はできたと言ってよいのではないか、と思っている次第です。

このときのMünchen留学は、わたしにとって大きな意義を持つものとなりました。何故かといえば、1983年はリヒャルト・ヴァーグナー（1813-83）没後百年のJubiläumsjahr（記念の年）で、Münchenのバイエルン国立歌劇場では音楽総監督ヴォルフガング・サヴァリッシュ（1923-2013）がちょうど82/83年のシーズンを通して、ヴァーグナーの舞台作品13本をすべて上演する、という壮挙を実現したのでした。Münchenに住居を見つけて間もなくわたしはそのことを知り、おりよくこのヴァーグナー・ツィクルスの「年間通し券」の発売予告にも気がついて、倍率2.5倍ともいわれた抽選にも当たり、13作品すべて（処女作『妖精』だけは演奏会形式での上演でしたが）を留学期間中に観ることができたのです。

帰国後は日本ワーグナー協会（1980年設立）に加入し、またわたしが帰国した直後の84年5月に設立された日本リヒャルト・シュトラウス協会（サヴァリッシュさんが名誉会長で、来日するたびに催しが企画された）の会員にもなって、わたしの「ドイツ・オペラ熱」はますます昂じていくわけでした。

ついでに書き添えておくと、サヴァリッシュさんは1988年夏に、今度はリヒャルト・シュトラウス（1864-1949）のすべての舞台作品を「ミュンヘン・オペラ祭

Münchner Opernfestspiele」の期間中に一挙に上演する、という快挙を成し遂げました。わたしも前期の授業を早々に切り上げて駆けつけたのですが、バレエ作品は別としてオペラのなかでは『ナクソス島のアリアドネ』だけ渡独が間に合わず、口惜しい思いをしたものです。このときに大挙して日本から駆けつけていた数十人もの日本リヒャルト・シュトラウス協会会員とご一緒に、大型バスを仕立て、ガルミッシュ・パルテンキルヒェンにあるシュトラウスの別荘を訪ねた（息子フランツの嫁にあたるアリーツェ [Alice Strauss, 1904-1991] さんがまだご存命で、応対してくださいました）ことも懐かしい思い出になっています。

シュトラウス協会の設立総会には駒場の石井不二雄先生（1936-85）もご出席だったと思うのですが、それから一年もたたないうちにご逝去なさるということは、当時すでに体調に異変が生じていたのでしょうか。助手だった時期に日本独文学会の学会誌『ドイツ文学』の編集委員会のお手伝いをしていて、そのときから（あるいは、もしかしたらそれ以前から）石井先生には、当時、全国的な規模で会員を擁して活発に活動していた「十九世紀ドイツ文学研究会」にお誘いいただいたり、また上智大学の木村直司先生の教え子の方々を中心に定期的に開かれていた「クヴァレ (Qualle) 会」（関西の代表的な研究者グループ「クヴェレ (Quelle) 会」をもじって命名された）というドイツ語講読の集まりに加えていただいたり、まだ若かったわたしの研究者としての「人脈」づくりと知識の拡充について多大のご恩を蒙りました。もっとご長命でいてくださったら、もっといろいろと恩恵を蒙ることもできただろうに、とかえすがえすも残念でなりません。

話を武蔵に戻すと、80年代の武蔵では教授会が年に20回くらい（つまり、授業期間中はほぼ隔週、という頻度で）開かれており、教授会終了後は決まって夜の江古田に繰り出したものでした。わたしがよくご一緒させていただいたのは、私市保彦、原幸雄、平林和幸というフランス文化専攻所属の先生がたで、そこにときおり英米文化専攻の佐野晃先生、日本文化学科の瀬田勝哉先生も参加なさいました。しかし何ととっても、3名のフランス文化専攻の先生がたと、しばしばカラオケまでご一緒したあげくに、終電の時刻を気にしながら帰路についたあの日々は忘れられません。

それはともかく、80年代半ばの人文学部欧米文化学科ではようやくネイティブスピーカーを専任教員に加えよう、という機運が盛り上がって、まず英米文化専攻で、次いで独・仏両専攻でも人事が起こされました。ドイツ系ネイティブスピーカーとして初めて同僚となったのはグレゴール・ヘーフリガー (Gregor Häfliger) さんで、富山大学から移籍してくれました。わたしは彼と二人で「ドイツ語作文」の授業を担当したり、89年だったか、初めて独文学会の「当番校」を引き受け、旧一号館と中・小講堂棟 (現二号館) を使用して総会・春季研究発表会を開催したときには彼にもシンポジウム企画を頼んだりして、仲良くやっていたつもりだったのですが、93年春にサバティカルを終えて帰国してみたら彼は関西学院大学に引き抜かれてしまっていて、正直に言うと少々、落胆したものでした (その後、ドイツに帰国していたヘーフリガーさんが、自動車を運転中に心臓発作を起こして亡くなった、という知らせを受けたのは、もう10年ちかく前のことになります)。

第二楽章：スケルツォ

1988年夏にドイツへ出かけたときには、そんな気配は微塵も感じなかったのですが、それから一年あまり後、89年秋に「ベルリンの壁崩壊」のニュースが世界中を驚かせ、翌90年にはドイツ再統一が実現しました。92年4月から一年間、武蔵の「国外研修員制度」によって再び München に住む機会を得たわたしにとってもっとも鮮明に記憶に残っていることといえば、日本ワーグナー協会の会員特典を利用して始めて体験した「バイロイト音楽祭」の至福の十日間のほか、再統一直後のドイツで実施されていた「二重価格制」をベルリンなどで実際に見聞することができたことが挙げられるでしょう。事実上、旧東独 (ドイツ民主共和国) の地域が旧西独 (ドイツ連邦共和国) に吸収合併されたに等しいとはいえ、すべての物価をいきなり旧西独のレベルで一本化すると旧東独地域の住民にとって負担が重くなりすぎる、との配慮から、旧東独地域では漸次、段階的に物価を引き上げていく、との配慮がなされていたのでした。結果として、西ベルリンから地下鉄に乗って東ベルリンに向かうときの値段と、同じ区間を逆向きに乗車する

ときの値段が（そのつど「片道切符」を買おうとした場合には）異なる、という珍しい状況が発生していたわけです。門外漢のわたしとしては、ただ珍しい状況に立ち会っているのだな、という感想を超えた分析ができた筈ありませんが、経済学の専門家にとっては垂涎の観察対象に違いない、と感じた次第です。

さて93年4月上旬、一年ぶりに東京に帰り着いたばかりのわたしが、初めて鳴った自宅の電話の受話器を取ったところ、お相手は神品芳夫先生で、『独文学会の姉妹団体「ドイツ語学文学振興会」で「ドイツ語技能検定試験」をスタートさせたので、手伝ってほしい』とのお話でした。前年秋に首都圏2会場＋関西圏1会場で第一回の試験を実施したばかりだった「独検」はその後、一回ごとに試験会場をどんどん増やしていき、春・秋の年二回実施となった95年あたりからは武蔵も試験会場に加わるようになって現在に至っています（年明けに行なわれる1級・2級〔現在は準1級〕の二次口述試験を含め年3回、江古田で「独検」をやっていた時期もありました）が、「独検」とわたしとの縁はこの一本の電話のやりとりから始まったわけです。

90年代のわたしは、DAAD留学時にお世話になったフォルカー・ホフマン教授が、「夏休みはイタリアの細君の実家で過ごすので、留守中はMünchenの自宅を使ってよい」と言ってくださるのをよいことに、毎年のように夏になるとドイツに出かけて「優雅な独身貴族」を謳歌していました。一方で、日本の大学には90年代初頭のいわゆる「大綱化」に伴って「改革」の波が押し寄せ、当時としては他大学と比べて「一般教育」と「専門教育」の垣根が低く、「先進的」なカリキュラムを実現していると自負していた武蔵の人文学部も、その波と無縁ではいられなくなってくるという状況でした。さまざまな検討事項が浮かんでは消え、最終的には98年の「社会学部」独立にいたります。欧米・日文・社会の3学科体制から社会学部が学部として独立した後、残った2学科のままで安定的な学部運営が可能なのか、という議論のすえ、新しく「比較文化学科」を設置することになりました。駒場出身の先生がたが目立っていた当時の人文学部教授会では、駒場の教養学部や大学院比較文学・比較文化専攻課程をモデルにした新学科構想が実現に向けて進められるのも当然、と言ってよいことだったかもしれませ

んし、スタートした新学科に対する受験生や受験産業界の反応もおおむね好意的だったと思いますが、新学科の学科運営にはさまざまな難題が伴ったようで、欧米文化学科ドイツ文化専攻から一時的に新学科に移籍なさった鈴木満先生が、たまたま廊下で会おうとときおり垣間見せる表情からも、そのことが窺えたものでした。

人文学部にとって大きな転機となったこの組織変更の一年前、1997年4月に人文学部長に就任なさった瀬田勝哉教授の補佐役として、わたしは学部の教務委員長を拝命し、それから二期四年間にわたり（後半の二年間は宮本袈裟雄学部長の補佐役として）微力を尽くしましたが、その四年めには少々、疲労困憊の状態に陥り、宮本先生にはいろいろとご迷惑をおかけする結果になってしまったように思います。私生活のうえでも98年にはようやく独身生活に別れを告げ、すぐに扶養家族も増えたので、98年という年は公私両面にわたって重要な転換点となりました。

第三楽章：アダージョ

2001年4月からわたしは再び、一年間のサバティカルをMünchenで過ごすことができました。到着して一週間くらい経った週末に大雪が降り、慣れない雪掻きに汗を流して風邪をひいてしまったことを覚えています。今度は妻子を伴っての生活でしたが、いちばん強く印象に残っているのは、ヨーロッパ共通通貨としてのユーロ（Euro）導入に現地で立ち会えたことです。年末、12月中旬から銀行で貨幣の交換が始まり、各種ユーロ貨幣を取りそろえて小ぶりのビニール袋に詰めた「スターターキット」が一セット20ドイツマルクで売り出され、わたしもさっそく二セット入手しました（そのうち一セットは現在でも未開封のまま、自宅の引き出しの奥に眠っている筈です）。紙幣については年明けを待たないと入手できませんでしたが、とくに自動販売機などの切り替えをどのようにして行なうのか、大晦日（Silvester）から元旦（Neujahrsfeiertag）にかけての作業の様子を野次馬気分で見守ったものです。ともあれ、このときの一年間は独身時代のように気軽かつ身軽に今日はベルリン、明日はウィーン、来週はドレスデンなどと飛びまわる

ことはもはやできず、それでも連れ合いの顔いろを窺いながら、ご機嫌を損なわない程度に旅に出ていましたが、夏のパイロイトだけは、すべての演目が観られるだけの日程を確保し、休演日にはニュルンベルクまで妻子を呼び出すなど気をつかいながら、堪能させてもらいました。

なお、親子3人で始めた München 生活でしたが、帰国時には家族が一人増えていました。3月20日、小雪の舞うなか大学附属病院 Klinikum Großhadern で誕生した長女を、生後二週間も経たないうちに飛行機に乗せることはできないので、妻子を現地に残してわたしは単身帰国、新学期の授業を始めておいて、ゴールデンウィークを利用してドイツに戻り、借家を引き払って今度は家族そろって日本に帰ってきたのでした。

21世紀初頭の十年間の武蔵・人文については、比較文化学科を発展的に解消して、新たに2005年から英米比較文化・ヨーロッパ比較文化・日本東アジア比較文化の3学科体制へと移行したことが、とくに大きな変化として挙げられます。

旧欧米文化学科から英米文化専攻の先生がたが念願だった学科昇格を果たし、後に残された独・仏専攻をヨーロッパ文化学科と改称するにあたっては、とくに他学部の教員から「学科としてやっていけるのか」との強い懸念も示されましたが、同僚たちが丸丸となって新名称にふさわしい充実したカリキュラムを検討・整備し、その後の入試実績も好調に推移したおかげで、いつしか懸念の声は聞かれなくなりました。またこの機会に旧日本文化学科も日本東アジア比較文化学科と名称変更し、3学科そろってグローバル化の時代に対応する体制であることが明確に示せるようになったことも、改組のメリットのひとつでした（なお、比較文化学科の「発展的」解消をシンボリックに表わす3学科共通の「比較」の文字は、2012年のカリキュラム改訂を機に学科名称から削除され、現在に至っています）。

わたし自身は、「独検」を主催するドイツ語学文学振興会の理事長を務めることになったり、練馬区長からの要請を受けて「練馬区演奏家協会」設立に向けた諮問委員会に参加するなど、学外での業務も増えて忙しい日々を過ごしていましたが、その「練馬区演奏家協会」の設立総会で司会進行役を務めることになって

いたにもかかわらず、直前にアナフィラクトイド紫斑という奇病に見舞われ、安静のため十日間ほど入院せざるをえなくなっていました。土壇場で欠席を余儀なくされることになったためにご迷惑をおかけした、初代会長の神野明さん（ピアノ：1948-2009）をはじめとする当時の運営委員の方々に対しては、現在でも申しわけない気持ちでいっぱいです。振興会については、理事長としての課題を3点（1. 公益法人化、2. 創立50周年記念行事、3. 「独検」の受験級増設）見据え、すべての課題をクリアすることができたと安心して言える時点まで、結局足かけ十年にわたって務めることになりました。

第四楽章：ロンド・カプリチオーソ

わたしの三回目の München 長期滞在は、2009年4月から一年間でした。長男は小学校5年生、長女は2年生になったところでしたが、住居の最寄りの小学校（Grundschule: ドイツの小学校は四年制）の4年生と1年生のクラスに編入してもらい、秋の進級時には長男のみ、バスで停留所5つほどの距離にあるギムナジウムに「進学」させてもらいました。子どもたちは一年ほど前から都内の語学学校でドイツ語会話の手ほどきを受けてはいたものの、現地の学校に放り込まれてみると、そのような準備はほとんど役に立たず、当初はかなり苦勞したようですが、それでも健気に学校生活を送ってくれました（当人たちの心のなかに懐かしい記憶として残っているようなら嬉しく思いますが、どうなのでしょう）。

このときも、夏のバイロイトには出かけさせてもらいました。日本ワーグナー協会の会員特典のおかげで、三度もバイロイト音楽祭を体験することができたわけですが、インターネットの時代になり、現地の音楽祭運営母体の方針転換もあって、この特典が廃止同然になってしまったのは残念です。

2011年3月11日、東北大震災が発生。その後福島第一原発の炉心溶融事故が起こり、放射能汚染を怖れて各国大使館が関西に一時避難したり、地域によっては計画停電が実施されたり、東京もかなり緊張した空気に包まれるなか、わたしは4月から人文学部長に就任しました。任期の二年間、ほとんど（被災学生に対する緊急援助制度や防災対策の整備など）震災の後始末ばかりしていたような気

がしますが、2012年4月に経済学部長に就任なさった板垣博先生、同じく社会学部長に就任なさった江上節子先生とご一緒に、何度も根津公一理事長をお訪ねして何か「談判」をした記憶だけが残っているのは、何が目的だったのか、「喉もと過ぎれば」ということか、もはや定かではありません。このころ実現に向けて動きはじめていた懸案の一つに「副学長制度の導入」ということがあったのは確かですが、そのときにはまさか自分が初代副学長に起用される運命にあるとは、夢にも思っていませんでした。

2016年から二年間、山崎哲哉学長のもとで副学長を、また兼任としてグローバル教育センター長を務めました（こちらは突発的の事情が発生したため副学長の任を解かれた後もさらに一年間、任にとどまることになりました）。

会議の連続する日々は苦痛でもありましたが、週末に山崎学長と手分けして各地の大学同窓会の支部総会に出席する、という職務はむしろ楽しみで、わたしは水戸、新潟と金沢はそれぞれ2回ずつ、加えて千葉、郡山、静岡、京都（関西武蔵会）、山形、広島、帯広（道東支部）なども訪ねる機会を得て、どこでも例外なく歓迎していただきました。またグローバル教育センター長としては、NAFSA や APAIE などの国際教育交流団体の年次総会に出席し、NAFSA では武蔵大学のブースも設置して交流と宣伝に努める、という業務もわたしにとっては嬉しい仕事で、一生足を踏み入れることはないだろうと思っていたアメリカにもデンバー、フィラデルフィア、ロサンゼルス、ワシントン DC と計4回出かけましたし、台北と高雄、シンガポール、クアラルンプール、さらにジュネーブにもセンター長の業務の一環として出張してきました。

学部長を務めた後、旧外国語教育センターと国際センターの業務を整理統合して発足したグローバル教育センターの業務に十年ちかくも携わることになりましたが、近年の世界的規模の新型コロナウイルス感染拡大によって、わたしたち大学教育関係者にとっても学生自身にとっても、国際交流の機会が大幅に制限され、グローバル化推進の流れに強くブレーキがかかってしまったことは残念至極、と言わざるをえません。

わたし自身、コロナ禍のせいでオンライン授業を実施せざるをえなくなり、当

初は困惑ばかりしていましたが、二年も経つうちに次第に慣れてきて、それまでは触れたこともなかったパワーポイントやYouTubeの動画も現在では授業で活用するようになりました。そもそも、武蔵に赴任してわたしが最初に研究費を使って購入したのはIBM社製の「電子タイプライター」でしたが、それからワープロの時代を経てパソコンの時代へと移り、現在に到っているわけで、教育現場で使用されるツールは、これからも日進月歩、変化していくことでしょう。音声資料や映像資料についても同じで、レコードやカセットテープ・ビデオテープの時代からコンパクトディスク・レーザーディスクの時期を経てDVD・ブルーレイディスクへと進化をつづけてきましたが、今後はもはやレコード店で各種ディスクを購入する人間は古くさい、と言われる時代に移っていくのかもしれない。そうだとしても、自分が元気でいるかぎり、またパイロイトに出かけたいと思ってしまうのは、ツールの進化とは異なる次元で芸術に具わっている「一回性の魔力」というものが、たしかにあるからこそなのでしょう。

終曲：コーダ

交響曲になぞらえつつ、江古田で過ごした四十余年をふりかえってきました。当初は「起・承・転・結」と銘打つことも考えていたのですが、わたしの人生がそれほどメリハリの効いた構造を体現できている筈もなく、方針を変えることにしました。もちろん、古典派の交響曲のように形式的に整ったものにもなる筈はなく、交響曲とは名ばかりの、実態はむしろ「狂想曲」もしくは「狂詩曲」のような駄文になっているでしょう。いずれにせよ、この回想記に登場して下さった方も、残念ながらお名前を挙げるができなかった方も、わたしの周囲にはつねに親切に接して下さる方ばかりがいらっしゃり、いろいろとご迷惑をおかけしながらも何かと助けていただいたおかげで定年退職の日を迎えることができます。あつく感謝申し上げます。